Public History, Vol.1, 2004, pp. 74-91
Between 'Just' and 'Unjust' Wars: The Commemoration of the First World War in Interwar Britain
Hiroshi TSUDA

正戦と反戦のはざまに
――大戦間期イギリスにおける戦没者追悼をめぐって――

津田博司

はじめに

2001 年 9 月 11 日、世界貿易センタービルの崩壊とともに、世界はその姿を大きく変えた。いわゆる「悪の枢軸」演説からアフガニスタンでのタリバン政権崩壊、現今のイラク戦争に至るまで、国際社会は目まぐるしい勢いで戦争への道を突き進んできた。1991 年の湾岸戦争終結後、アメリカの政治学者マイケル・ウォルツァーは、「正戦論」Just-war theory について論じた著作の序文で外交におけるリアリズムの専横を痛烈に批判し、国際法による戦争犯罪の規制と強力な国際調停機関の設立による戦争の抑止を訴えたが(1)、「9・11」事件以降のアメリカはむしろ、ときに「デモクラシーの帝国」としての帝国的要素を指摘されながらも、揺るぎない「正戦」の思想を信じて疑ってこなかったように思われる。

だが、ここで筆者が注目したいのは、この「反テロ戦争」が「新帝国」アメリカのみならず、かつて同じく帝国としての隆盛を極めた「もう一つの帝国」イギリスによって支えられているという事実である。「9・11」事件後、ブレア政権は他国に先駆けてアメリカへの支持を表明し、

(1) 'Preface to the Second Edition' in Michael Walzer, *Just and Unjust Wars: A Moral Argument with Historical Illustrations*, 2nd ed., New York, 1991, xxii. なお、正戦論の起源は、古くキケロやトマス・アクィナスらに求められる。そこで論じられる「正戦」bellum justum とは、明確な開戦法規 jus ad bellum と交戦法規 jus in bello を理論化することで、法によって「正当化され得ない戦争」を規制するための概念であった。しかし、現実の戦争は複数の「正戦」の衝突であり、その正当性を客観的に評価することは難しい。その結果、正戦論はしばしば深刻な破綻に陥り、リアリズムに基づく無差別戦争観の克服が課題とされてきた。マーティン・シーデルは、正戦論のように基本的には戦争を否定しつつも、一定の条件下での戦争の正当性を認める立場を「相対平和主義」pacificism と呼び、全ての戦争を無条件に拒否する「絶対平和主義」pacifism と対比している。本稿では、彼の議論を前提にしながら、この両者に連なる分析概念として「正戦」と「反戦」の語を用いた。シーデル自身による定義については、Martin Ceadel, *Pacifism in Britain 1914-1945: the Defining of a Faith*, Oxford, 1980, pp.1-8 を参照。

その後も一貫して戦争の継続に重要な役割を担ってきた。その意味において、イギリスもまた「正戦」の思想の影響を免れてはいない。本稿は、大戦間期イギリスにおける第 1 次世界大戦の戦没者の追悼を通じて、戦争がイギリスの人々の間でどのように記憶されたのかを明らかにし、そこに現在まで続く「正戦」の思想の起源を探ろうとする試みである。

近年の日本の論壇では、歴史教科書問題や靖国神社参拝問題などをめぐって、過去の戦争をどのように記憶していくかが広く関心を集めてきたが、学術的な研究対象としての戦争の記憶というテーマは開拓の途上にある。その背景の 1 つには、敗戦後の日本社会において、戦争の記憶を語ること自体が長く忌避されてきた経緯があるだろう。また、本稿が扱う戦没者追悼といった活動を論じる際、国家権力による大衆動員のためのプロパガンダという側面のみが強調され、これらの活動を通して「国家」あるいは「国民」としてのアイデンティティを議論する関心が長く不在であったことも重要な問題である[(2)]。

日本のイギリス帝国史研究という文脈では、佐々木雄太による 2 つの世界大戦とフォークランド紛争についての先行研究がある[(3)]。佐々木は、イギリスにおいて戦争の記憶が今もなお「価値あるもの」として再生産されていく様子を描き出し、そこに潜むイギリス人の「帝国意識」へ強い批判の目を向けた。戦後の日本との比較から、「イギリス人には過去の戦争に対する悔恨 regret はあっても、反省 reflection が存在しない[(4)]」とする論者の主張は非常に鋭い。しかし、その反面で、「帝国意識」という要素の強調によって、戦争の記憶の持つ意味が相対化されている点は無視できない。例えば、戦後のイギリスで「ファシズムに対する輝かしい勝利の記憶」が支配的であった事実は、あくまで根強い「帝国意識」の反映とされており、「帝国意識」それ自体が戦争の記憶を含む様々な言説によって構築されたものであるという認識は議論の背景に退いている。こうした傾向は、全ての記憶を「帝国意識」の言説へと還元してしまう危険をはらんでいる。

戦争の記憶の諸相に迫るためには、その記憶が生産される「記憶の場」となる追悼式典などに対する詳細な検討が必要となる。第 1 次世界大戦が当時の人々に与えた衝撃の大きさを強調し、大戦による現代人の世界観の変容を主張したポール・ファッセルの著作[(5)]を契機として、大戦間期以降の様々な文芸作品を参照しながら、当時の人々に広がっていた終末的な大戦像を跡づけたジェイ・ウィンターによる研究[(6)]など、イギリスでは第 1 次世界大戦の記憶を扱った研究

---

(2)　ただし、近年では戦争の記憶への社会的関心の高まりを受けて、戦後日本における戦争の記憶を論じた研究も発表されている。例えば、小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞ ── 戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、2002 年など。同書は直接的に戦没者追悼を対象としてはいないが、戦争にまつわる言説の変遷過程への注目という点で、本稿も問題関心の多くを共有している。

(3)　佐々木雄太「イギリスの戦争と帝国意識」木畑洋一編著『大英帝国と帝国意識』ミネルヴァ書房、1998 年、237-263 頁。

(4)　佐々木、同上、240 頁。

(5)　Paul Fussell, *The Great War and Modern Memory*, London, 1975.

(6)　Jay Winter, *Sites of Memory, Sites of Mourning: The Great War in European Cultural History*, Cambridge, 1995.

が相次いで出版されている。それらの中でもエイドリアン・グレゴリーによる研究は特に示唆に富んでいる[(7)]。彼は大戦間期イギリスの戦没者追悼活動を人々の言説がせめぎ合う場としてとらえ、その考察から追悼が有した同時代人にとっての心理的な重要性を論じた。彼自身は、言語論的転回以降の言説分析を重視する歴史学に対して一定の距離を置いているが、本稿では、あえて戦没者追悼活動のみならず、同時代人の戦争に対する認識といった言説を積極的に取りあげ、グレゴリーの研究では十分に論じられなかった神話の反復の側面に着目する。そうした上で、相互に緊張関係にある多様な記憶の潮流の中から、「正戦」の思想が台頭していく過程を再構成するのが本稿の目的である。

序文を終えるにあたって、本稿の全体の流れを予め概観しておこう。周知の通り、人類史上初の総力戦である第 1 次世界大戦は、当時のヨーロッパ人に非常に大きな衝撃を与えた。とりわけイギリスでは、戦没者の追悼活動が大戦間期を通じて活発に行われ、各種の戦争モニュメントの建設などがかつてない規模で進められた。イギリスにおける戦没者追悼の伝統は 1920 年代に急速に確立され、第2次世界大戦の足音が近づき始める 1930 年代に大きな岐路を迎える。さらに第 2 次世界大戦後、大戦間期の多くの伝統は引き継がれるものの、イギリスにおける戦争の記憶は決定的な変化、すなわち「正戦」の記憶の再形成を経験する。本稿では、この時期の戦没者追悼が有するいくつかの特徴、わけても「フランダースの赤いポピー」と「平和の白いポピー」という 2 つの追悼のシンボルと、そこに表象される「正戦」と「反戦」の思想の対立から、国際的な平和運動の展開をもたらした第 1 次世界大戦の記憶が、同時に、第 2 次世界大戦を新たな「正戦」として受け入れる前提となったことを明らかにしたい。

1　伝統の形成ー大戦間期の戦没者追悼の基本的性格

現在のイギリスでは、第 1 次世界大戦の休戦協定が結ばれた 11 月 11 日に最も近い直前の日曜日を「戦没者追悼記念日」Remembrance Day（または Remembrance Sunday）として、両世界大戦およびそれ以降の戦争で命を落とした人々を追悼する様々な催しが行われている。

特にロンドンのホワイトホールで行われる追悼式典は、女王を始めとする王族、首相や野党党首、かつては大英帝国に属し、イギリスとともに戦った旧植民地の国々の大使といった要人が列席する、非常に大規模なものである。さらに、その式典の最後には、実際に戦争を戦った退役軍人たちによる大がかりなパレードが行われる。このことからも見てとれるように、現在の戦没者追悼記念日は軍事的な色彩が強く、彼ら退役軍人たちは追悼式典の主役となっている。

戦没者追悼記念日は、第 1 次世界大戦後に成立した「休戦記念日」Armistice Day が前身となって、第 2 次世界大戦の終戦後に新たに成立したものである。この大戦間期の休戦記念日は、現在の戦没者追悼記念日とは性格を大きく異にする日であった。本章では、特に休戦記念日に多

(7)　Adrian Gregory, *The Silence of Memory: Armistice Day 1919-1946*, Oxford, 1994.

く行われた追悼式典などの様子を追いながら、大戦間期の追悼活動一般が持つ特徴について見ていくことにする。

「嘆きの場」としての休戦記念日

第 1 次世界大戦によるイギリスの死者は、少なくとも 70 万人以上、負傷者は 160 万人を数えるとされる[(8)]。これらの大量殺戮による犠牲者を追悼する場の必要性は、すでに大戦中から認識されていた。大戦中を通じて、イギリスが戦争参加に踏み切った 8 月 4 日には教会で追悼ミサが行われ、戦没者のための霊廟 war shrines も各地で建設された[(9)]。また、戦争の終結が近づくにつれて、大戦後にも戦没者のための記念日を継続すべきだ、との呼びかけが新聞紙上で行われるようになった[(10)]。

終戦後の 1919 年 7 月 19 日、ヴェルサイユ条約の締結を記念して、連合国軍による戦勝パレードがロンドンで行われた。首相のロイド・ジョージは、この日を新たな「平和の日」Peace Day とする計画を検討していた。彼の構想では、「平和の日」は人々が勝利を祝うとともに、戦争を戦った兵士たちに敬意を払い、国王への忠誠を示す記念日として定着するはずであった。しかし、これに対する同時代人の反応は冷たい。例えば、当日の『デイリー・ヘラルド』紙に掲載された投書は、以下のように述べている。「息子を失った母親たちは、どのようにこの日を過ごすのでしょうか。喜びの鐘が鳴り響き、人々が浮かれ騒いでいる一方で。（中略）平和の日を望むのは、心ない人だけでしょう[(11)]」。この投書の主はおそらく戦没者の母親であると思われる。悲惨な戦争で肉親を失った彼女のような人々にとって、新たな記念日は、戦勝の喜びを称えるものであってはならなかったのである。

ロイド・ジョージら政府の側の試みが不調に終わる一方で、この日の催しのために建設された「無名戦士の碑」Cenotaph には、それ以降も絶えることなく人々が弔問に訪れた。この無名戦士の碑は、壮大な古典様式を用いた建築で定評のあったエドウィン・ラチェンズの設計によるもので、材質が木と漆喰であったことからもわかるように、あくまで仮設のモニュメントとして建設された。「平和の日」の式典で中心を占めたのは、軍隊によるパレードであり、無名戦士の碑は副次的な存在にすぎなかったからである。しかし、「栄誉ある死者」The Glorious Dead と大きく刻まれたその姿は、当時の人々に強い印象を与え、無名戦士の碑の取り壊しを惜しむ声が強まった。無名戦士の碑は、それを建設した政府の意図を離れ、人々が死者の魂とふれあう神聖な場として受けとめられた。『デイリー・グラフィック』などの各紙は、無名戦

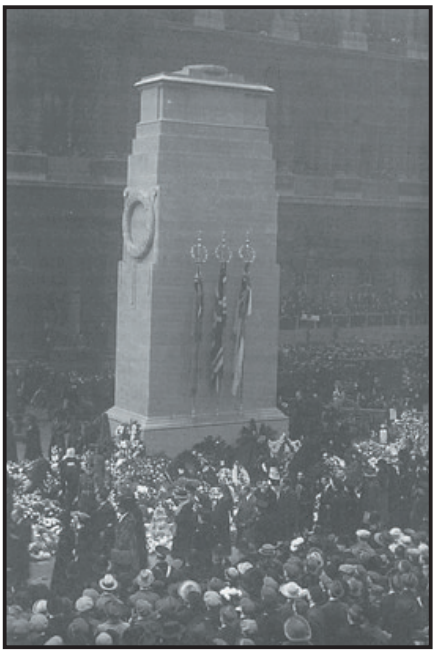
---

(8)　Niall Ferguson, *The Pity of War*, London, 1998, p.295.

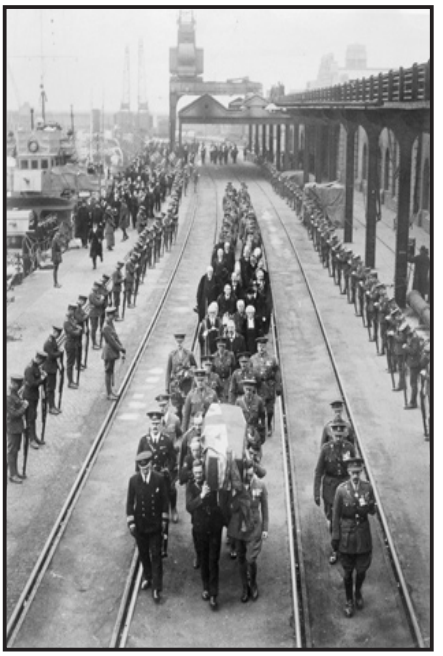
(9)　第 1 次世界大戦下の追悼活動については、Alex King, *Memorials of the Great War in Britain: The Symbolism and Politics of Remembrance*, Oxford, 1998, pp.44-61 を参照。

(10)　Mark Connelly, *The Great War, Memory and Ritual: Commemoration in the City and East London 1916-1939*, Woodbridge, 2002, p.139.

(11)　*Daily Herald*, 19 July 1919（David W. Lloyd, *Battlefield Tourism: Pilgrimage and the Commemoration of the Great War in Britain, Australia and Canada, 1919-1939*, Oxford, 1998, p.52 からの引用）.



再建された「無名戦士の碑」の除幕式
典拠：Imperial War Museum Q31494



ウェストミンスターへ移葬される無名戦士の棺
典拠：Imperial War Museum Q11468

士の碑の前を通過する際に脱帽することを紙面で呼びかけ、この提案は下院でも討議されている。[12] その結果、無名戦士の碑は建設当初の設計を変えることなく、永遠に残る石造のモニュメントとして新たに再建されることになった。

こうした「平和の日」の失敗の後、それに代わるものとして、この年の 11 月 11 日、最初の休戦記念日の式典が行われる。翌年の休戦記念日には、新たに再建された無名戦士の碑の除幕式が開かれた。この除幕式にあわせて、ウェストミンスター寺院内に設けられた「無名戦士の墓」Tomb of the Unknown Warrior に、イープル、ソンム、エーヌ、アラスといった第 1 次世界大戦の激戦地から選ばれた無名戦士の遺体が埋葬されたこともあり、数十万人の人々が除幕式に参加した。無名戦士の碑とウェストミンスター寺院を訪れた人々は、わずか 4 日間で 150 万人を超えた。[13] これらの「記憶の場」は大戦間期を通じて多くの人々をひきつけ、ロンドンのみならずイギリス中の人々が訪れる「巡礼地」となった。以後、ロンドンにおける休戦記念日の追悼式典は国王や首相の参加の下、この無名戦士の碑の前で行われることになる。この点については、現在の戦没者追悼記念日も同様である。

こうして始まった大戦間期の休戦記念日の特徴を示すものとして、「2 分間の沈黙」を挙げることができる。これは大戦時に南アフリカで高等弁務官を務めていたパーシー・フィッツパトリックの提案によって成立したもので、11 月 11 日 11 時 11 分の砲撃を合図として、イギリスの全国民が一斉に戦没者のため 2 分間の黙祷を捧げるという儀式である。フィッツパトリックによれば、この儀式の目的は 4 つある。第 1 に、しばしば女性、特に「寡婦」として表象される遺族の心の傷を癒すこと。

(12) *Ibid.*, p.60.
(13) King, *op. cit.*, p.21.

第 2 に、子どもたちに現在の自由をもたらしたのが誰であるのかを認識させること。第 3 に、戦争を戦った帰還兵士たちに敬意を表し、死んでいった戦友を追憶する機会を与えること。最後に、自らの命を投げ出した戦没者の栄誉ある死を想起することである。[14] フィッツパトリック自身は、追悼式典という儀式の性格上、戦没者の死を栄誉あるもの、永遠なるものとして記憶することを、最も重要視していた。

しかし、休戦記念日は単に死者のみに捧げられる日ではなかった。大戦間期の追悼活動において、残された生者である遺族女性が果たした役割は注目に値する。休戦記念日の追悼式典の様子は、多くの場合、無名戦士の碑の前に列をなし、献花する女性たちの描写とともに報道された。無論のこと、式典には男性も多く参加していたが、特に 1920 年代の後半になると、休戦記念日は遺族女性たちによって担われるもの、あるいは、休戦記念日の主な役割は遺族女性の心の傷を癒すことにある、という認識がしだいに一般的となったと指摘されている。[15] 例えば、1920 年 12 月の『イルフォード・ウォー・メモリアル・ガゼット』はこう語る。「無名戦士とは、戦争で命を落とした全ての夫、息子、兄弟、恋人の象徴である。彼の神々しい墓の周りには遺族の悲しみが集まり、彼の死が持つ不滅の美しさに、彼女たちは慰めを見出すだろう」。[16] 彼女たちにとっての休戦記念日とは、華々しく戦勝を祝う場ではなく、戦争によって肉親を奪われた悲しみを表現する「嘆きの場」であった。先述の「平和の日」の失敗、それとは対照的な休戦記念日の驚くべき成功の背景には、遺族のための「嘆きの場」を求める同時代人の思いがあったと考えられる。

次節では、上のような認識が生じていった背景を理解するため、当時各地で建設が進められた戦争モニュメントの図像分析などを参照しつつ、第 1 次世界大戦の記憶のされ方について見ていきたい。

「戦争を終わらせるための戦争」

第 1 次世界大戦は、ときに「戦争を終わらせるための戦争」the war to end all wars として語られてきた。『タイムマシン』などの SF 小説の作者として知られ、大戦中には対独宣伝局長を務めたハーバート・ジョージ・ウェルズによって生み出されたこの言葉は、戦時下では戦争を正当化し、戦意を高揚するための「正戦」のレトリックとして広く用いられた。しかし、大戦終結後、そのレトリックは再び戦争が繰り返されないことを願う人々の間で、未曾有の大量殺戮による戦没者の死を意義あるものとして受けとめるための「神話」として読みかえられていくことになる。

そもそもウェルズがこの言葉を考案したのも、第 1 次世界大戦勃発の直前に出版された小説

(14) Gregory, *op. cit.*, p.10.
(15) *Ibid.*, pp.32-34.
(16) *Ilford War Memorial Gazette*, no.3, 1920（Connelly, *op. cit.*, p.148 からの引用）.

『解放された世界』で、科学兵器を駆使した戦争（驚くべきことに、同小説には「原子爆弾」の描写も登場する）による世界の荒廃を図らずも「予言」してしまった彼が、来るべき最終戦争による人類の破滅を回避するためには、戦争の根絶こそが不可欠であると考えたからであった。彼は開戦後に『戦争を終わらせるための戦争』と題した著作を出版し、戦争の目的は世界平和に反するドイツ軍国主義の打倒にあると訴えた[17]。こうしたウェルズの思想は、彼自身が戦争中から反戦運動に関わり、世界政府の樹立による平和の実現を構想していたことに表れている。彼が「戦争を終わらせるための戦争」を支持したのは、大戦後に到来するはずであった、2 度と戦争の起こることのない社会、憎むべき戦争から「解放された世界」を目指してのことであった。

大戦間期の休戦記念日が遺族たちの「嘆きの場」となったことからもわかるように、第 1 次世界大戦は、再び繰り返してはならない悲劇として受けとめられた。その典型的な例が、当時活躍したシーグフリート・サスーンら戦争詩人たちの作品である。彼らは、戦場の悲惨さに目を向けない安易な戦争賛美を厳しく批判した。例えば、自身ソンム戦線などに従軍した詩人ロバート・グレーヴスは、その自伝小説『さらば古きものよ』（1929 年出版）において次のように述べている。「死んでいった人々は、とりたてて道徳的ではなかったし、とりたてて悪人だったわけでもない。彼らはごく普通の兵士だった。生き残った人々はいま生きていることを神に感謝すべきであり、将来の戦争を避けるべく最善を尽くさねばならない[18]」。グレーヴスは同じ作品の中で、従軍経験のないウェルズらの反戦運動に対して違和感を表明しているが、多くの人々の命を奪う戦争に対する嫌悪という点では同じであった。戦争に対するこのような感情は、同時代人に少なからず共有されていたと考えられる。

ここで注意を向けるべきなのは、戦争そのものは悲惨な絶対悪として描かれる一方で、その犠牲となった戦没者はあくまで「栄誉ある死者」として追悼されたという点である。第 1 次世界大戦後に建設された戦争モニュメントに関する研究を行ったキャスリーン・モリアーティの指摘によれば、これらのモニュメントには「記憶」memory という言葉が刻まれているものが多く存在するが、この言葉に付される形容詞は常に「名誉ある」honoured、「栄誉ある」glorious、「誇り高い」proud、「神聖な」sacred といった戦没者の死を称えるものであった[19]。つまり、彼らの死は意義ある犠牲として記憶され、単に痛ましく無意味な喪失として受けとめられることはなかった。戦争に対する恐怖を背景として生まれた「戦争を終わらせるための戦争」という第 1 次世界大戦の神話は、戦没者を「英霊」Heroes として「聖別」するという重要な機能を果たしたのである。

---

(17) Herbert G. Wells, *The War That Will End War*, London, 1914, Ch1.

(18) Robert Graves, *Goodbye to All That*, London, 1960, p.331（ロバート・グレーヴス、工藤政司訳『さらば古きものよ（下）』岩波書店、1999 年、243 頁）.

(19) Catherine Moriarty, ‘Private Grief and Public Remembrance: British First World War Memorials’, in Martin Evans and Ken Lunn, eds., *War and Memory in the Twentieth Century*, Oxford, 1997, p.137.

こうした「聖別」の場となったのが、戦争モニュメントの除幕式やその前で行われる休戦記念日の式典、そこで行われる「2 分間の沈黙」であった。特に、モニュメントの除幕式は重要である。というのも、モニュメントの除幕を行うのは、多くの場合、戦争で家族を失った遺族女性だったからである。ここでもまた追悼活動の「嘆きの場」としての性格が確認される。さらに、彼女たちにとっての追悼式典は、その際に行われる演説にしばしば登場する「国王と祖国、帝国のために」といったレトリックを通じて、家族を失った悲しみという私的な嘆きの感情を、公的な誇りへと昇華させる場でもあった。当時行われた演説のなかには、戦時中の苦難、家族や友人を失った嘆きや悲しみについて述べながらも、これらを最終的に、戦没者の自己犠牲の美しさと結びつけるものが少なくない[20]。ともすればナショナリズムの強化にも通じるような、こうしたレトリックが大戦間期の人々、特に戦争で肉親を失った遺族たちにとって、心の慰めをもたらす神話として受容されたという事実は、後に大きな意味を持つことになる。

「フランダースの赤いポピー」の登場

休戦記念日の式典を始めとする大戦間期の追悼活動が、遺族女性たちの「嘆きの場」という性格を強めていった点、そうした「嘆きの場」において、戦没者たちがしだいに「英霊」として顕彰されていった点、さらに、その背景として「戦争を終わらせるための戦争」という神話が重要な役割を果たした点についてはすでに述べた。それでは、その「戦争を終わらせるための戦争」を戦没者とともに戦い、生き残った帰還兵士たちは、追悼活動において、どのような立場にあったのだろうか。

フランスやアメリカの場合とは異なり、イギリスでは帰還兵士の組織化が遅れ、彼らの発言権はさして大きくなかったとされる。そのため、帰還兵士は大戦間期を通じて、非常にマージナルな存在へと追いやられることになった。例えば、休戦記念日の追悼式典においても帰還兵士たちによる行進が行われてはいたが、それは現在ほど大きな位置を占めるものではなかった。

特に深刻だったのは、傷痍軍人たちの失業問題である。帰還兵士の大半が順調に市民生活への復帰を果たすものの、1920 年には 10 万人の帰還兵士が失業中であった。戦後の不況が始まった 1922 年初めには、その数は約 60 万人に増加した。また、彼らへの公的な経済支援もほとんど行われなかった[21]。戦没者の追悼が熱心に行われる一方、自分たちの苦境が見過ごされていることに対する帰還兵士の苛立ちは強かった。1920 年 10 月には、失業中の帰還兵士たちがロンドンのホワイトホールで抗議集会を行い、警官隊と衝突するという事件が起こっている。死んだ戦友たちが顕彰される無名戦士の碑を前にして、同じく死を賭して戦った自分たちが警棒で殴打されるという皮肉な光景は、彼らに衝撃を与えた[22]。戦没者の死が意義あるものとして記憶

(20)　除幕式での自己犠牲の強調と愛国心の交錯の具体例は King, *op. cit.*, p.175-176 を参照。
(21)　Gregory, *op. cit.*, pp.51-54.
(22)　*Ibid.*, p.56.

される反面、帰還兵士たちの問題は忘却されてしまったように思われた。

こうした状況で成立したのが、第1次世界大戦の英雄であったヘイグ伯を中心として、1921年に結成された英国在郷軍人会British Legionである。[23]戦争によって苦しめられている帰還兵士、あるいはその家族や遺族への経済的支援を主な目的とするこの団体は、イギリス初の全国規模の軍人組織となった。大戦間期の休戦記念日から現在の戦没者追悼記念日に至るまで、英国在郷軍人会は一貫して大きな役割を果たし続けることになる。それを最もよく表すのが、「ポピーの日」Poppy Dayという休戦記念日の異名の由来となった同団体による募金活動である。

1918年にフランスで戦病死したカナダ人の詩人ジョン・マクレーの詩「フランダースの野に」[24]にちなんで、休戦記念日に赤いポピーを模した造花を販売し、その収益によって帰還兵士らの支援を行う試みは、予想外の成功を収めた。1921年に行われた最初の募金活動の収益金は、総額で10万6千ポンドに及んだ。[25]さらに、ポピーの生産工場で帰還兵士を雇用することによって、英国在郷軍人会は彼らの失業問題についても対策を行い、団体の社会的貢献はチャーチルら政府の政策決定に関わる人々からも高く評価された。

ここで重要なのは、休戦記念日の募金活動の主役となったのが、またしても遺族女性だったことである。そもそもポピーの販売による募金活動は、アメリカでのYMCAの活動に端を発し、それがフランスの慈善運動家アンナ・ゲランを通じて、英国在郷軍人会へと伝えられたものであった。[26]アメリカとフランスの両国では、ポピーの生産は主に遺族女性と孤児によって行われ、収益金の多くが、彼女たちに対する支援や戦災地の復興に向けられたという性格の違いはあるものの、戦争によって困窮している人々を援助するという、募金活動の基本的精神とその担い手という点では、イギリスの事例と共通している。英国在郷軍人会が設立当初から女性支部を設けていたという事実も、遺族女性によるイニシアティヴの重要性を裏付けるものであろう。

「フランダースの赤いポピー」は、上記のような募金活動を通して人々にしだいに認知され、休戦記念日のシンボルとして定着することになった。「戦争を終わらせるための戦争」に自らの命を捧げた戦没者、彼らの死を嘆きながらも、そこに「英霊」としての意義を見出そうとする遺族女性、その「英霊」とともに戦争を戦い抜き、現在は不当な境遇におかれている帰還兵士、「フランダースの赤いポピー」はこれらを表象するものとして、大戦間期イギリスにおける戦争の記憶を形成していくのである。

---

(23) 1971年からはRoyal British Legionと改称。その成立までの過程については、Brian Harding, *Keeping Faith: The History of The Royal British Legion*, Barnsley, 2001, pp.1-8を参照。

(24) この詩は、第1次世界大戦中に従軍医師を務めていたマクレーが戦友の死を悼み、その墓の周囲に咲く赤いポピーを前にした心情を綴ったもので、1915年12月に『パンチ』誌に掲載された直後から大きな反響を呼び、彼の死後現在もなお人々に広く親しまれている。

(25) Harding, *op. cit.*, p.123.

(26) *Ibid.*, p.121.

2　錯綜する記憶ー正戦と反戦のはざまに

大戦間期のイギリスの人々が戦没者追悼という「嘆きの場」を求め、戦時下には「正戦」のレトリックであった「戦争を終わらせるための戦争」という神話に新たな意味を見出し、そこに救いを求めようとしたことについてはすでに述べた。第2次世界大戦後とは対照的な帰還兵士たちの追悼活動での「不在」は、戦勝を誇るための追悼を拒否し、戦争に対する強い嫌悪を感じていた同時代人の心情を表すものとして理解できよう。「フランダースの赤いポピー」は、こうした戦争の記憶の特徴を物語る存在であった。

当時の人々にとって、戦争が安易な賛美の対象となるものでなかったことは、間違いない事実だろう。その意味では、彼らの戦争に対する態度は、疑いなく「反戦」の立場にあったと言える。しかし、ここで問題となるのが、その戦争で命を落とした戦没者が「英霊」として顕彰され続けた点である。すでに指摘したように、悲惨な戦争による肉親の死を受けとめようとする追悼の行為は、「国王と祖国、帝国のために」というレトリックを通じて、結果的にナショナリズムへと回収される可能性を持っていた。「戦争を終わらせるための戦争」による犠牲を意義あるものとして記憶することは、その戦争そのものを正当化しかねない。大戦間期の追悼活動は「反戦」の性格を有すると同時に、依然として「正戦」のレトリックによって支えられていた。

このようなパラドックスが強く認識されるのは、次なる戦争が近づき始める1930年代である。ここではまず、既存の「フランダースの赤いポピー」に対抗するシンボルを掲げた平和運動団体の活動を扱う。さらに、第2次世界大戦の勃発を受けて、大戦間期に形成された戦争の記憶がその後どのように変化し、現在にまでつながっていくのかについて考察する。

「平和の白いポピー」

大戦間期は1920年の国際連盟の成立などにみられるように、平和運動が国際的に活発化した時代でもある。第1次世界大戦の惨禍に衝撃を受けた人々は、戦没者の追悼だけでなく、戦争のない世界の実現に向けても模索した。例えばイギリスでは、1933年、オクスフォード大学の学生組織であるオクスフォード・ユニオンによって、「国王と祖国のための」戦争を拒否する決議が行われている。そうした諸活動の中でも、1936年の平和誓約協会Peace Pledge Union（以下PPUと略記）の成立と「平和の白いポピー」の運動は、この時期の平和運動の金字塔として評価されている。

PPUは、イギリス国教会の聖職者であったディック・シェパードによって設立された。シェパードは休戦記念日の追悼式典のラジオ初放送に尽力したことで知られており、休戦記念日のあるべき姿についても積極的に発言を行った。従来の戦没者追悼のありように疑問を感じていたシェパードは、1927年に平和主義への転向を宣言する。1934年、彼は新聞紙上で「私は戦争を拒絶し、直接的にも間接的にも、一切の協力や支持を行わない」という宣誓の呼びかけを行った。宣誓への賛同者は1ヵ月で3万人を超え、翌年には10万人にまで達した[27]。この平和運動のシンボルとなったのが「平和の白いポピー」である。

そもそも「平和の白いポピー」は、エレノア・バートンを中心とする女性協同組合ギルド Women's Co-operative Guild（以下 WCG と略記）の平和運動から生まれたものであった。WCG はすでに 1920 年代半ばから、独自の平和運動を行っていた。1933 年、戦争の悪を連想させず、それでいて目につくシンボルを求める組合員の声に応えて、ギルドの組合員は休戦記念日に白いポピーを身につけることが決定された。白いポピーはギルドの組合員以外にも販売され、個人の平和主義の象徴としてしだいに広まっていった。[28] PPU もまた「平和の白いポピー」をシンボルとして採用し、WCG などの団体と協力して運動を展開した。

この「平和の白いポピー」が、「フランダースの赤いポピー」を意識したものであることは明らかである。それでは、両者の相違点はどこにあるのだろうか。「平和の白いポピー」は「再び戦争を起こしてはならないという平和への誓い」、「戦闘員、非戦闘員、敵味方を問わない全ての戦争の犠牲者の象徴」であるとされた。[29] それに対して、「フランダースの赤いポピー」は前章で述べたように、まず第一に戦没者の崇高な犠牲を象徴する追悼のシンボルであった。シェパードらは、赤いポピーが持つこうした性格をナショナリズムの容認、ひいては戦争の賛美につながるものとして厳しく批判した。いかに人々が戦争を嫌悪しようとも、追悼の名の下での「英霊」崇拝は戦争それ自体を否定するものではない。彼らは従来の休戦記念日に代わる、絶対平和主義に基づく戦争根絶を訴える場を求め、1937 年から 1939 年の休戦記念日に独自の平和集会を行った。「もう 1 つの休戦記念日」の運動は、それまでは意識されてこなかった、戦没者追悼とナショナリズムとの関係を人々に「発見」させることになった。

戦没者を「栄誉ある死者」として位置づけることで心の救いを見出そうとしていた人々にとって、この「発見」は深刻な問いを投げかけるものであった。これまで見てきたように、確かに人々の間には戦争に対する嫌悪が広がっていた。だが、絶対平和主義の立場からすれば、全ての戦争は許されざる悪であり、それはたとえ「戦争を終わらせるための戦争」であっても例外ではない。戦没者はもはや栄誉ある「英霊」ではなく、無意味な大量死として理解されることになる。肉親を失った悲しみを癒すため、「嘆きの場」を求めざるを得なかった遺族たちにとっ

1937 年の休戦記念日に「平和の白いポピー」を掲げる女性たち
典拠：Liddington, *op.cit.*

(27) Peace Pledge Union, 'Brief History of the PPU', on the Peace Pledge Union website <http://www.ppu.org.uk/ppu/ppu_histx.html>（2003 年 11 月 10 日参照）.

(28) Jill Liddington, *The Road to Greenham Common: feminism and anti-militarism in Britain since 1820*, New York, 1991, pp.161-162（ジル・リディントン、白石瑞子・清水洋子訳『魔女とミサイル ── イギリス女性平和運動史』新評論、1996 年、175-176 頁）.

(29) Gregory, *op. cit.*, p.153.

て、このような認識は耐え難いものであった。また、帰還兵士にとっても、戦争に参加すること自体を非難する平和運動とは距離を置かざるを得なかった。PPU や WCG が当初、英国在郷軍人会にポピーの生産での提携を求めたにも係わらず、再三にわたって申し出が拒否されたことからも、このことがうかがえる[30]。彼らにとっては、戦争における犠牲の尊さを象徴する「フランダースの赤いポピー」こそが唯一のシンボルでなければならなかったのである。

ただし、実際の追悼式典では、これら 2 つのポピーの両方を身につける人々も存在した。ここからは、絶対的な「反戦」を目指す運動に共感を寄せる人々は少なくなかったことが見て取れる。その一方で、休戦記念日に赤いポピーではなく、白いポピーを身につけることは、ときに嫌がらせを招くものであった[31]。たとえ「正戦」の容認の可能性をはらむとされても、既存の追悼活動を支持する人々は依然として多かったのである。平和運動家イレーネ・ラスボーンの小説に登場する 2 人の女性の姿は、こうした断絶をよく物語っている。無名戦士の碑に毎年花を手向けるのを欠かさず、亡くなった夫たちが顕彰されていることにささやかな慰めを感じる女性と、同じ無名戦士の碑の前で戦争の恐ろしさを思い、決別の意味を込めた「空しく命を落とした人々のために」という花輪を残して去っていく女性の対比は、当時の人々が置かれていた立場の縮図であろう[32]。

このような、2 つのポピーが表象する「正戦」と「反戦」の思想の関係が決定的なものになるのは、第 2 次世界大戦によってである。新たな戦争の勃発は、第 1 次世界大戦の意味、戦争に対する態度のあり方を根本から問い直すことになる。

反復される神話

「平和の白いポピー」という新しいシンボルの登場は、今まで表面化してこなかった「正戦」と「反戦」の思想の対立を浮き彫りにした。特に問題となったのが、大戦間期を通じて「栄誉ある死者」として顕彰されてきた戦没者の位置づけである。しかし、この 2 つの思想の対立は、過去に起こった戦争に対する認識のみをめぐるものではなかった。それはむしろ現在、または将来の戦争への姿勢をめぐるものであった。そこで焦点となるのは、戦争を望むか否かではなく、戦争が不可避となった場合にどのような態度をとるかである。

戦争を社会で権力を握る男性たちが引き起こす暴力としてとらえ、女性としての立場から平和運動に参加したヴェラ・ブリテンは後年、PPU が設立されたときの印象を次のように回想している。「第 1 次世界大戦後の 15 年間、集団安全保障を支持する人々と革命的な平和主義を唱える人々の間には、倫理面での大きな断絶が常に存在していたが、それが強調されることはなかった。しかし、第 2 次世界大戦の脅威とともに、その隔たりはしだいに明らかとなった。

---

(30)　*Ibid.*, p.156. なお、この事実は PPU および WCG 側の主張によるもので、英国在郷軍人会が編纂した会史（例えば Harding, *op. cit.* など）には記載されていない。

(31)　*Ibid.*, p.155; Liddington, *op. cit.*, p.162（同訳書、176 頁）.

(32)　Irene Rathbone, *They Call It Peace*, London, 1936, pp.612-617.

どんな状況下であっても戦争は不正であると信じる人々は、最後の手段として戦う準備のある人々とは、もはや手を携えることができないのだ」[33]。この点において、「フランダースの赤いポピー」と「平和の白いポピー」はもとより相容れない存在であった。彼女のような「反戦」の思想を信じる人々にとっては、いかなる意味での「正戦」もありえなかったのである。

大戦間期に確立された「戦争を終わらせるための戦争」という戦争理解が、必ずしも戦争を全否定するものではなかったことは既述の通りである。つまり、「反戦」の立場の表明であったはずの戦没者追悼活動は、同時に「正戦」としての戦争を受け入れる可能性を持っていた。この言葉を生み出したウェルズの行動は、そのことを如実に物語っている。同時代の誰よりも早く核戦争の恐怖を認識し、世界連盟運動など戦争のない世界の姿を模索した彼は、まさにその認識の故にこそ、「戦争を終わらせるための戦争」という「正戦」に協力せざるを得なかった。彼の思い描いた「解放された世界」は、「正戦」と「反戦」のはざまを揺れ動くユートピアだったと言える。

ウェルズに代表される大戦間期の人々は、このような二つの思想がせめぎ合う中で、第2次世界大戦を迎えた。ドイツに対する宥和政策の展開に見られるように、大戦間期のイギリス外交の基本的方針は、さらなる大戦の回避であった。従来の研究においても、この時期に宥和政策への国民的支持が広がった要因として、第1次世界大戦の惨禍が人々に与えた衝撃が指摘されている[34]。多くの人々にとって、戦争は何を犠牲にしても回避すべきものであった。このことは、本稿が扱ってきた大戦間期の戦没者追悼が有する特徴、PPUなどの諸団体による平和運動の展開からも理解できよう。

その一方で、ムッソリーニによるアビシニア侵攻、スペイン内戦の勃発、ドイツにおけるナチス政権の成立といった軍事的緊張の高まりは、戦争の回避が困難な現実を感じさせるものであった。ファシストの侵略行為に対して民主主義を守るため、必要ならば武力を用いて対抗すべきなのか否か、人々は重要な選択を迫られた。「平和の白いポピー」の生みの親であるWCGの内部でも、この問題をめぐって激しい議論が交わされている。1938年6月の委員会では、「絶対平和主義は間違いではないが、現時点においては実行不可能である」との発言が見られ、組合員の間にはギルドの平和主義に対する懐疑が少なからず広がっていた[35]。このような緊迫した状況の中で、ミュンヘン会談をともかくも成功に導いたネヴィル・チェンバレンは、戦争を回避した偉大な「調停者」として絶大な評価を受けることになった。

しかし、平和を維持するための宥和政策は、結果としてヒトラーの増長を招き、完全な失敗に終わった。チェンバレンは自らの努力が無に帰した落胆をにじませつつ、ドイツに対して宣戦を布告する。20年間続けられてきた休戦記念日の追悼式典は中断に追い込まれ、人々はさらに悲惨さの度合いを増した戦争へと邁進した。戦時下の1916年に徴兵制が導入された先の

---

(33) Liddington, *op. cit.*, p.159（同訳書、172-173頁）.
(34) 佐々木、前掲論文、246頁。
(35) Liddington, *op. cit.*, p.163（同訳書、177-178頁）.

大戦と異なり、第 2 次世界大戦時には開戦前から兵役制度が施行されており、総力戦体制はより強固なものとなった。それに加えて、ドイツ軍による空襲 Blitz は戦場で戦う兵士だけでなく、「銃後」の民間人をも戦争の犠牲に巻き込んだ。このような総力戦体制の強化は、それまでの戦争に特徴的であった、兵士と民間人との間の乖離を解消することにも寄与した。

こうして始まった第2次世界大戦、特に1940年7月10日から10月31日までのいわゆる「バトル・オヴ・ブリテン」の時期は、以前から存在していた階級などによる分断を超えて、イギリス社会全体が連帯してドイツと戦った「民衆の戦争」the People's Warとして長く語られてきた。この時期に形成された社会改革についてのコンセンサスが、1942年のベヴァリッジ報告の呼び水となり、ひいては戦後の福祉国家体制を成立させる要因となったという評価もある。(36) またイギリスでは、第1次世界大戦の経験から「良心的兵役拒否者」conscientious objectorの存在が問題となっていたが、彼らは第2次世界大戦の渦中で自らの「特権的立場」に安住することなく、戦災者への援助などの様々な活動を行った。彼らは直接的に戦争に協力することはなかったが、彼らによる社会貢献も「民衆の戦争」という神話の一翼を担うことになったとされている。(37)

「民衆の戦争」は、1941 年の大西洋憲章にも見られるように、ファシズムに対して自由と民主主義を防衛するための戦争として宣伝された。もちろん、チャーチルらの政府指導者にとっての戦争とは、大英帝国が有する権益をいかにして保持するかという戦いに他ならず、このような戦争像は単なるレトリックにすぎなかったかもしれない。しかし、反ファシズムの「民衆の戦争」という神話が、戦中および戦後の人々の意識を強く規定し続けてきたこともまた、否定しがたい事実である。そして、その「民衆の戦争」という「正戦」の容認をもたらしたのが、大戦間期の追悼活動を通じて形成された「戦争を終わらせるための戦争」という神話であった。この事実を証明するかのように、「解放された世界」を希求したウェルズもまた、第 2 次世界大戦を新たな「戦争を終わらせるための戦争」として評価し、むしろ積極的に戦争を支持している。(38)

さらに、第 1 次世界大戦期の女性の戦争協力について論じたポール・ウォードは、1930 年代にある女性によって書かれた、以下のような未刊行の回想録を紹介している。「私たちは皆、戦争によって恐ろしい悲しみと喪失を経験した。しかし、私たちは今でもなお、たとえそれが最も恐ろしい宿命であろうとも、戦うという決断が正しいことを信じる。1914 年にイギリ

(36)　こうした「民衆の戦争」史観はリチャード・ティトマスらによって提唱されたが、近年は従来の学説に対して否定的な研究も出されてきている。これまでの議論の概略については、渡辺知「第 2 次大戦下のイギリス社会と良心的兵役拒否者－マス・オブザヴェイション文書を中心に－」『駿台史学』第 110 号、2000 年 8 月、55-57 頁を参照。

(37)　渡辺、同上、72-73 頁。

(38)　ウェルズの第 2 次世界大戦への認識と戦後世界の構想については、Herbert G. Wells, *The Common Sense of War and Peace: World Revolution or War Unending*, New York, 1940 を参照。

スがそうしたように」[39]。ここでは、皮肉なことに、人々の記憶に戦争の悲惨さを植えつけた第1次世界大戦が、イギリスの戦争参加の正しさを示すために語られている。「戦争を終わらせるための戦争」という第1次世界大戦の神話は、大戦間期に新たに与えられた「反戦」の性格を喪失し、「正戦」遂行のためのプロパガンダという、その本来の意味で再び反復されたのである。

ロンドン大空襲を報じる『デイリー・メイル』
（1940年12月20日付）
ドイツ軍の激しい爆撃にさらされながらも、奇跡的に被害を免れたセント・ポール大聖堂の姿は、第2次世界大戦の神話形成に大きな役割を果たしたとされる。
典拠：Malcom Smith, *Britain and 1940: History, Myth and Popular Memory*, London, 2000.

休戦記念日から戦没者追悼記念日へ

第2次世界大戦は、この戦争によって新たに生じた戦没者をどのように追悼するべきかという問題をもたらした。第1次世界大戦時のような大規模な陸上戦が回避されたことにより、第2次世界大戦の戦死者数は先の大戦を大きく下回った。しかし、空襲による民間人の死者はおよそ6万人に上り、これらの戦没者の追悼は緊急の課題であった。前述の通り、休戦記念日の追悼式典は中断されていたため、従来のような追悼活動を再開すべきなのかどうかも議論の対象となった。第2次世界大戦の戦没者のために独立した記念日を新たに定めるのか、それとも両世界大戦の戦没者を一括して追悼する記念日を定めるべきか、仮に新たな記念日を定めるとしても、最も適当な日はいつなのか、といった議論が議会の内外で行われた。

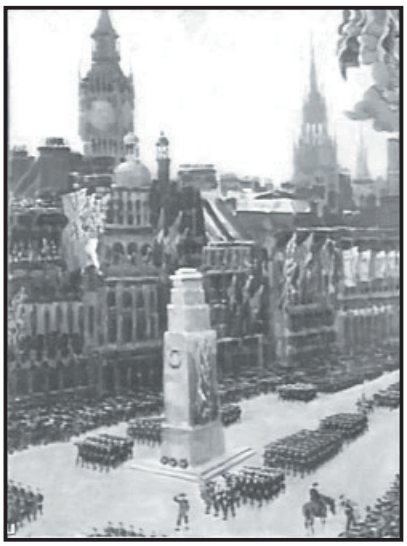
当時内務省で候補として検討された主な日を見てみよう。例えば、ドイツが降伏した5月8日、ノルマンディー上陸作戦が行われた6月6日、マグナ・カルタが制定された6月15日、アメリカの独立記念日である7月4日、大西洋憲章が調印された8月14日、日本が降伏した8月15日、第2次世界大戦が開戦した9月3日、「バトル・オヴ・ブリテン」の記念日である9月15日、カトリックの万霊祭が行われる11月2日、最後に、第1次世界大戦の休戦記念日である11月11日などである[40]。何よりもまず検討された候補の多さに驚かされるが、注目すべきはその内容である。直接戦争に関係する日だけでなく、イギリスの民主主義的伝統を示すマグナ・

(39) Paul Ward, "Women of Britain Say Go': Women's Patriotism in the First World War', *Twentieth Century British History*, vol.12, no.1, 2001, p.45.
(40) Gregory, *op. cit.*, p.218.

カルタや、今や重要なパートナーとなったアメリカを意識してアメリカ独立記念日までもが考慮されている。同時代人にとって、2つの世界大戦の位置づけがいかに困難なものであったかが推測されよう。予想されるように、どの日についても万人の了解を得ることはできなかった。

様々な議論を経た終戦の翌年、アトリー首相によって、11月11日および12日が日曜日である場合を除き、11月11日の直前の日曜日を戦没者追悼記念日と定め、戦没者の追悼式典を行うことが決定された[41]。その理由としては、戦時中から休戦記念日の週の日曜日に戦没者の追悼ミサが行われていたことがある。また、大戦間期の追悼活動を通じて、休戦記念日が人々の間で大きな位置を占める存在となっていた点も重要であった。いずれにせよ、戦没者追悼記念日はこうして、両世界大戦とその後の戦争の戦没者を一括して追悼するという、他にあまり例を見ない記念日となったのである。

上述の経過のように、戦没者追悼記念日は休戦記念日の伝統を継承する記念日として成立した。前章で述べた英国在郷軍人会による募金活動は、戦時中から一貫して継続されていた。また、ロンドンでの追悼式典は、やはり無名戦士の碑の前で行われている。しかし、戦没者追悼記念日は、大戦間期の休戦記念日と比較して、明らかな性格の違いを持っていた。その変化は、追悼活動の主体が遺族女性から帰還兵士へと交代したことに象徴されている。戦後の米ソ冷戦体制の到来は、大戦間期の人々が願った「解放された世界」の実現を困難にし、外交における軍事力の重要性を人々に改めて認識させた。休戦記念日は、遺族女性の「嘆きの場」から、ファシズムに対する「輝かしい勝利の記憶」を再生産する場へと転換した。大戦間期に批判の対象となった軍隊の行進は、第2次世界大戦後にはむしろ、追悼式典の中核をなすものとなった。それとは相反するかのように、休戦記念日の重要な伝統であった「2分間の沈黙」は1995年に再開されるまで、公式の式典では長く廃止されたままであった。



第2次世界大戦後の戦勝パレード
典拠：Colin Colahan 画 *Victory Parade*
（Australian War Memorial 所蔵）

そうした転換をもたらしたのは、前節において扱った「民衆の戦争」という「正戦」の記憶の成立である。かつては「調停者」として賞賛されたチェンバレンも、第2次世界大戦開戦後には、不当な妥協に応じた「戦犯」としての非難を一身に受けることになった。ファシズムの打倒には「血と労苦と涙と汗」による戦いが不可欠だったとされ、戦没者追悼記念日は戦没者を「英霊」として顕彰するだけでなく、「正戦」の思想をより積極的に再生産する場として機能していく。かつては遺族

(41)　*Ibid.*, p.221.

たちの嘆きの象徴であった「2 分間の沈黙」も、戦後 50 周年を迎え、ナチスドイツに対する勝利の記憶が改めて喧伝される中で、過去の戦争における犠牲の尊さを確認する行為として復活した。「2 分間の沈黙」はもはや、肉親を失った心の痛みを癒すための儀式ではなくなった。それは、イギリスという「国家」、イギリス人という「国民」が戦争の記憶を通して、自らの連帯を確認するための儀式に変化したのである。

おわりに

本稿では、大戦間期のイギリスにおける戦没者追悼を中心として、2 つのポピーに表象される「正戦」と「反戦」の思想が対立する様子を見てきた。大戦間期の追悼活動において、この両者の区別は非常に曖昧なものであった。1930 年代に絶対平和主義のシンボルとして「平和の白いポピー」が登場した後も、「フランダースの赤いポピー」は 2 度と戦争を繰り返さないための誓いを示すシンボルとして認識されてきた。そのシンボルとしての二重性は現在においても基本的に変わっていない。

しかし、第 2 次世界大戦によって決定的な地位を獲得した「正戦」の思想は、戦後のイギリスの人々の意識に強い影響を与えてきた。本稿の冒頭で提起したイギリスによる「反テロ戦争」支持という問題も、その一例としてとらえることができる。第 2 次世界大戦後の戦没者追悼記念日は、もはや遺族女性の「嘆きの場」ではなく、イギリスが戦った「正戦」で命を落とした「英霊」と、その「正戦」から生還した帰還兵士のための記念日へと変貌を遂げた。彼らによって語られる「平和」は、常に「正戦」の思想と表裏一体の性格を有している。言うまでもなく、こうした「正戦」の思想もまた、それを支える戦争の記憶とともに変容を繰り返しながら、再生産されていくものである。最後に、現在のイギリスにおける戦争の記憶の変容を物語る 2 つの事例を紹介して、本稿を結びたいと思う。

全世界に衝撃を与えた「9・11」事件後の 11 月 11 日、戦没者追悼記念日の式典の最後を飾ったのは、かつて「正戦」を戦った帰還兵士ではなく、崩れ落ちる世界貿易センタービルで決死の救助活動を行った消防隊員であった。この年には戦没者だけでなく、同時多発テロの犠牲となった人々へ向けて「2 分間の沈黙」が捧げられた[(42)]。また、現在英国在郷軍人会が中心となって進めている「ヴァーチャル・メモリアル計画」において、両世界大戦以降の戦没者に加えて、この事件の犠牲者の名前を「刻む」ことも検討されている[(43)]。アメリカとイギリスという新旧の帝国が持つこれら 2 つの記憶は、本来ならば全く結びつく必然性のないものである。こうした動きからは、戦没者追悼記念日の持つ性格が変化していることが見てとれよう。

---

(42) Tania Branigan, ‘September 11 adds new poignancy to November 11’, *The Guardian*, 12 Nov. 2001.

(43) Nick Paton Walsh, ‘Remembrance Day’s website ‘rebranding’’, *The Observer*, 11 Nov. 2001.

しかし、このような変化の一方で、翌年の戦没者追悼記念日には、オクスフォード主教リチャード・ハリエスが次のような論説を寄せている。「今日の自由は、過去の戦争の兵士たちによって、高い代償と引き替えに勝ち取られたものである。紛争が蔓延し、無慈悲な人々が自らの利益を追求する世界で、国際秩序を守るために戦うのは尊敬すべきことである」。「我々の多くはヒトラーと戦い、打ち負かすことが必要であったと信じている。20 年前のフォークランドでは、武力によって領土を併合するべきではないという原則を守ることが必要だと信じていた。その 10 年後には、我々はクウェートで同じことをなしたのである[(44)]」。彼の言説は、過去の戦争の記憶が反復を繰り返し、「正戦」の思想が強化されていく過程を物語っている。このような戦争の記憶のダイナミズムは、戦没者追悼記念日が今後、前述の「9・11」事件の犠牲者のように、追悼の対象をより拡大しつつ、「正戦」の思想を絶え間なく再生産していく可能性を示唆している。

これらの例が示すように、戦没者追悼記念日とそれを取り巻く言説は固定的ではなく、常に差異を生じながら変化し続ける。戦争の記憶をめぐる議論において今後歴史家が果たすべき役割があるとすれば、それは、この絶えざる変化の過程を経て変わりゆくものと変わらざるものとを見極め、それらを歴史的な文脈上に位置づけた上で、可能な限り多くの解釈を人々に提示していくことではないだろうか。

(44)　Richard Harries, ‘Our debt to those who died’, *The Observer*, 10 Nov. 2002.